佐賀県公式Facebook

「応援します。さが中山間」の公式ページはこちら

https://www.facebook.com/pref.saga.chusankan/

中山間地域に関する情報を随時発信中。フォローください。

佐賀県

佐賀県 農林水産部 農政企画課

〒840-8570 佐賀市城内1-1-59　0952-25-7115

山のふところ

佐賀

中山間地域 11のいとなみ

佐賀県公式Facebook

「応援します。さが中山間」の公式ページはこちら

https://www.facebook.com/pref.saga.chusankan/

中山間地域に関する情報を随時発信中。フォローください。

佐賀県

佐賀県 農林水産部 農政企画課

〒840-8570 佐賀市城内1-1-59　0952-25-7115

佐賀 山のふところ

中山間地域 11のいとなみ

山のふところ、農のみどころ。

中山間地域、山の営み。その暮らしは、ひとくくりにはできない。
ひとつの生業で暮らしがはじまりふたつあれば、未来がひらく。
みっつ、よっつを挑戦と呼ぶ。
そんな生き方に山はいつも優しい。流した汗は、実りとなって返ってくる。
そして、時に厳しさを教えてくれる。
そんな11の営みを集約。
山のふところ、農のみどころをお届けします。

01 デンデン農園　幸松 伝司
02 大川三世代　代表　田代 憧仁
03 都心運送株式会社　アグリ課リーダー　小川 亮太
04 かしま自然農園株式会社　代表取締役　奥 正好
05 森の香　菖蒲ご膳　代表　佐保 和彦
06 佐賀県指導林家　諸熊 雅博
07 農家　草場 廣
08 茶屋二郎　園主　松田 二郎
09 株式会社西村商店　Ribbon部門　塘 さなえ
10 たかしま農園　高島 賢一
11 脊振の百笑　高島 敏弘

YAMA NO FUTOKORO
01

農業と地域活動。どっちもやるから、未来が見える。

デンデン農園
幸松 伝司

「デンデン農園」を営む幸松さんは、退職を機に専業農家へ。きっかけは、生まれ育った伊万里市川内野地区の未来を守るため。人口減少、高齢化が進む地域の交流人口を増やすべく、イルミネーションや音楽祭、子どもたちへの課外授業、修学旅行生の受け入れなどの地域活動を積極的に行います。農業の主力商品は栄養価の高い黒米とプチヴェール。健康という付加価値のある商品は、中山間地域で少量の栽培ながらもしっかりと利益につながっています。

農業 × 地域活動

中山間地域の魅力

伊万里市・川内野は周囲を山々に囲まれた標高約200mの中山間地域。幸松伝司さんは「川内野の田んぼを未来に伝える」という言葉のもと、農業と地域活動に励みます。「最初はおいしい米をつくる村おこしグループを立ち上げました。一生懸命にやっていると、賛同して協力してくれる人が増えていきました」と話す幸松さんが行う活動は、たくさんの人を巻き込んでいます。黒米を用いた加工品の製造は、企業と共に。地域イベントは地元の人と、そして地元以外の人と共に。協働しながら明るい地域の未来を実現させます。

取組

◎取組 1

黒米、プチヴェール、白ナスなど珍しく付加価値の高い作物を生産しています。一年を通して収穫があり、直売所の販売をはじめ、加工品での販売で収益を上げます。その他、棚田を活かした景観作物の栽培にも力を入れているそうです。

◎取組 2

田んぼコンサートや猪の侵入を防ぐ柵を活用したイルミネーション、子どもたちへの課外授業、修学旅行など、地域の活性化につながる交流人口を増やす活動を行なっています。地域住民との絆を大切に、力を合わせて地域を守っています。

活用した補助事業

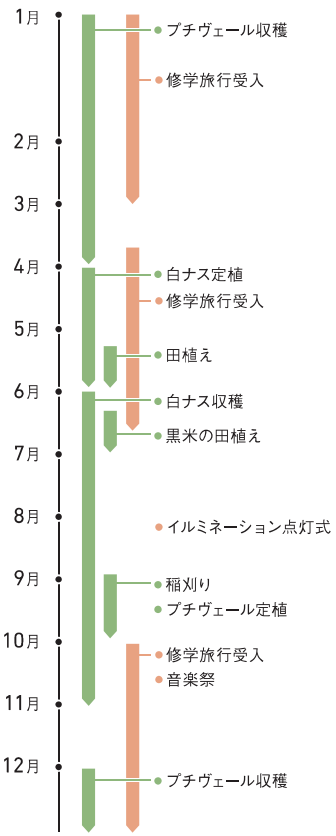
- さが農村ビジネスサポート事業(県単)(平成29年度)
【主な取組】商品開発委託、商品リーフレット・シール・ラベル・包装用パック作成等
- さが農村ビジネス支援事業(県単)(令和元、3、4年度)
【主な取組】商品開発、パッケージ・リーフレット・ロゴデザイン作成等

今後のチャレンジ

良い状態で、次の世代へ。

農家の高齢化が進む川内野地区では、市街地にある直売所への出荷が困難になっています。幸松さんは地域おこし協力隊とタッグを組み、共同出荷をスタート。その他にも、挑戦したいことは多々あるそう。後継者や次の世代へのバトンタッチも視野に入れています。

年間のスケジュール



YAMA NO FUTOKORO
02

この先100年、産地を守るために。

大川三世代 代表
田代 慎仁

118年前に始まった伊万里の梨生産。一大産地であるが、後継者不足という問題に直面。そんな問題の解決やさらなる産地のブランド力アップを目指して、若手梨農家のグループ「大川三世代」を結成しました。ブランドの確立、インターネット販売、観光農園のオープンなど、精力的な動きを見せています。

農　業 × 観光農園・カフェ経営

中山間地域の魅力

田代慎仁さんは、伊万里の梨農家3代目。平成16年に若手梨農家グループ大川三世代を結成しました。「118年前に始まった伊万里の梨の生産。全国的にも有名な産地になりましたが、後継者不足に悩みます。この産地を次の100年につなぐことを目指して結成しました」と田代さん。ネット販売で顧客を全国に増やし、5年前からは、観光農園とカフェをスタートしました。伊万里に年間約3,000人を呼び込むようになった事業は、梨農家の魅力を伝え、産地の魅力発信にもつながっています。

取組

◎取組 1

梨農家の3代目として、若いときから梨の生産に励みます。田代さんは、乳酸菌製法や減農薬生産など先進的な生産に積極的で、生産技術の向上にも熱心です。異業種、他地域とのつながりも大切にしていて、販売や営業活動にも力を入れています。

◎取組 2

大川三世代は、現在4名体制で活動中。梨の生産をはじめ、加工品の製造、観光農園の運営、カフェの営業、梨のネット販売を手がけています。知名度も徐々に広がっていて、その取り組みは多くの注目を集めています。

活用した補助事業

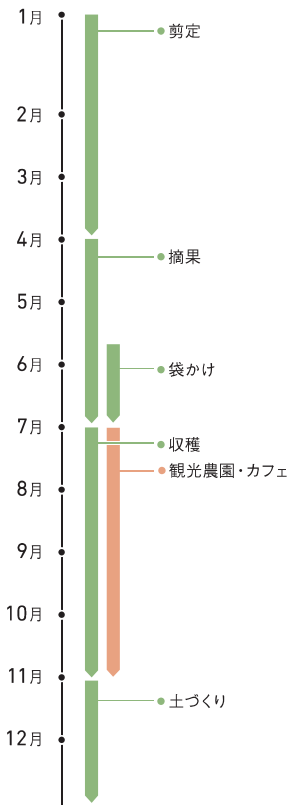
- さが農村ビジネスサポート事業(県単)(平成30年度)
【主な取組】観光農園の休憩等施設の整備、パンフレット制作・印刷、案内看板、のぼり旗作成等
- さが農村ビジネス支援事業(県単)(令和2、3年度)
【主な取組】梨加工品の開発、ラベルデザイン、ホームページ開設費(構築費)

今後のチャレンジ

梨のブランド力UPに、新たな試み。

「今後は、これまでの活動をより強化させながら、梨の産地を守るための活動を行っていきたい」と田代さん。誰もが気軽に農業を始められる未来の実現を夢見ます。また、営業の際の信頼度アップや雇用を増やすことを目的に株式会社化も視野に入れています。

年間のスケジュール



YAMA NO FUTOKORO
03

社員のセカンドキャリアと地域貢献。両輪で、走る。

都心運送株式会社 アグリ課リーダー 小川 亮太

都心運送株式会社 常務執行役員 陣内 優

昭和34年創業の都心運送。本社を福岡県糟屋郡に置き、福岡・佐賀・熊本を拠点に運送業を営みます。グループ会社を含めると従業員の数は、400人以上。重労働なため、早期に現役を退いたドライバーのセカンドキャリアのために「農業」に着目。中山間地域の廃みかん畑で農業をスタートしました。品目は、都心運送が営業所を置く白石町が生産に力を入れるレモン「璃の香（りのか）」。町の協力を受け、新たな挑戦に向け走りはじめました。

運送業 × 農業

中山間地域の魅力

都心運送が璃の香を生産するのは、佐賀県白石町の白岩地区と深浦地区。山間部に位置し、高齢化に伴う休耕地の増加が課題です。「山間部に不足している労働力を都心運送が補うことで、町や地域の人たちの理解や協力を得ています。この地区でとてもいい関係が築けていると感じています」と話す小川さん。地域の期待も背負いながら進む取り組みです。2024年には、初めての収穫が迫っています。今後は、都心運送が培ってきた物流の力を活かし、璃の香を白石町の名産として、遠方まで届けられると見ているそうです。

取組

◎取組 1

福岡県糟屋郡に本社を置き、福岡や佐賀、熊本を拠点に60年以上続く運送会社。一般貨物輸送部門に加えて、北部九州のコンビニに食品や飲料を届けています。営業所も各地に設け、地域からの信頼も厚い企業です。

◎取組 2

ドライバーの仕事は重労働でもあります。そのため退職時期が早く、ドライバーの第二の仕事を確立することが求められていました。そこで、目を付けたのが農業。佐賀営業所がある白石町にて、新種のレモン「璃の香」の生産をスタートしました。

活用した補助事業

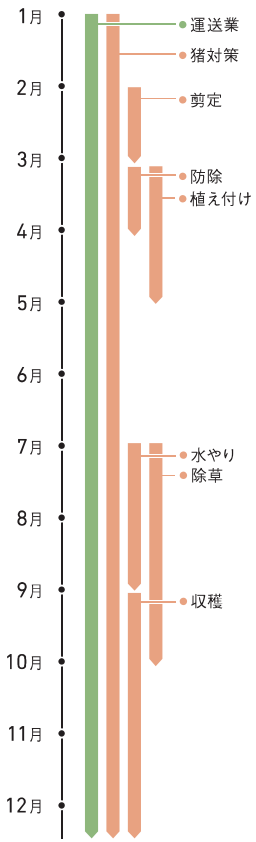
・白石町新規農作物作付拡大推進事業費補助金(町単独)
【主な取組】璃の香の苗木を植え付けの際に活用。(R4年度:500本、R5年度:200本)

今後のチャレンジ

従業員のために、地域のために。

初めての収穫は2024年の秋頃。今後は、地区と力を合わせて面積を広げ、6次化も視野に入れた生産体制の確立を目指します。「ドライバーが引退した後も、安心して仕事ができる仕組みづくりは会社の魅力アップにもつながります」と話してくれました。

年間のスケジュール



YAMA NO FUTOKORO
04

農業未経験だったからこそ見える課題を解決したい。

かしま自然農園株式会社
代表取締役
奥 正好

かしま自然農園の代表を務める奥正好さんは、福岡市の生まれ。鹿島市の耕作放棄地を紹介され、その農地から見える有明海の眺めに惹かれ移住し、農業をはじめました。元々、デザインやWEBサイトを制作する事業やっていたこともあり、自ら事業をすることに抵抗はありませんでした。とは言え、初めての農業。農地の条件などを考慮して、生産をはじめたのはそばでした。さらに、収穫されるそばを使ったスイーツは、地域が抱える課題を解決する糸口になっています。

農業 × そば粉専門スイーツ店

中山間地域の魅力

「素人でも生産できる作物を探してたどり着いたのは、そばでした。しかし、私たちの農地で収穫できるそばはわずか。だから、加工品にして販売しようと考えました」と話す奥さん。そこではじめたのがそば粉専門のスイーツ。グルテンフリーなど、健康志向の人に注目され、売り上げを伸ばしています。「加工品は増えゆく耕作放棄地に歯止めをかける手段のひとつ。農業の担い手を増やしていかなければと思っています」奥さんは、自らが成功例になり『儲かる農家』の仕組みづくりを目指し、その先に鹿島市への移住者を増やそうと奮闘しています。

取組

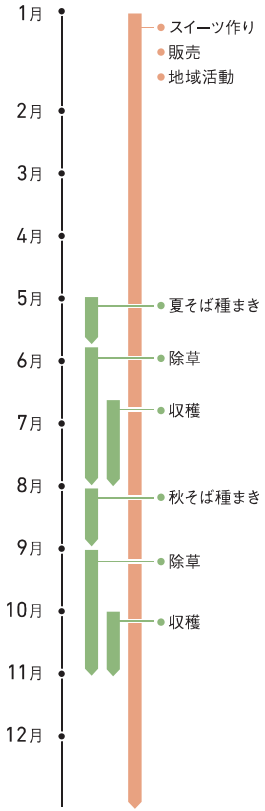
◎取組 1

手探りではじめたそばの栽培も、経験を重ね、面積も拡大中。最初はつながりの薄かった地域の農家さんたちとの関係性も深まり、農家としての知識も実績も増えてきた様子。年に2回の収穫のために、畑で汗を流します。

◎取組 2

実は、スイーツづくりも経験がなかった奥さん。動画サイトで作り方を学び、コンビニなどをまわり売れ筋のスイーツをリサーチしたと言います。直売や卸しに加えて、キッチンカーでのイベント出店も好評を得ています。

年間のスケジュール



活用した補助事業

・中山間地休耕田等利用促進事業補助金(市単独)
【主な取組】中山間地域の不整形地(荒廃園・遊休農地)を開墾する際の経費の一部を補助。遊休農地をそば畑に開墾。(R2年度 187,000円)

今後のチャレンジ

これまでの経験、すべてが活きてくる。

「同じく耕作放棄地でそばを作っている団体は県内に8つあります。そこから、できるだけ高くそば粉を買い取って加工品づくりを続けたいですね」と話す奥さん。農家の儲かる仕組みをつくり、就農者や移住者を増やし、農地を守ることを今後のビジョンに掲げています。

YAMA NO FUTOKORO
05

山菜、人、風景。この地域は宝物だらけだった。

森の香 菖蒲ご膳
代表
佐保 和彦

標高400mほどの場所にある佐賀市富士町菖蒲地区。1990年代ごろから地区の資源を使った地域おこしが積極的に行われてきました。この地で生まれ育った佐保和彦さんは、定年退職を機に、農業メインの生活へ。地域おこしの事業にも中心となって参加し、2009年には山菜レストラン『森の香 菖蒲ご膳』を地区のみなさんと力を合わせてオープンさせ、現在は2代目の代表を務めます。また、農家としても新しい山菜の生産にも取り組むなど、精力的な動きを見せています。

農業 × 山菜レストラン経営

中山間地域の魅力

山菜レストラン『森の香　菖蒲ご膳』は、地区の人たちが株主となって運営されています。「身土不二（地元の旬の食品や伝統食が身体に良い）」という理念のもと、未来に残すべき地域の姿を発信しています。「最初の頃は、山菜料理が喜ばれるか疑問に思っている地区の人もいましたが、お客さまがおいしいそうに食べる姿を見ると、段々とその疑問は、誇りに変わっていったようです」と当時を振り返ります。さらに農家としては、米の他に『行者にんにく』の生産にもチャレンジ。この地区の新たな名産品を生み出そうとしています。

取組

◎取組 1

米の生産をメインに、山菜の管理、新たな品目・行者にんにくの生産を行います。収穫した行者にんにくは、直売所での販売以外に、加工して販売する可能性も探っています。他の作物も加工し、6次化産業への発展も視野に入れています。

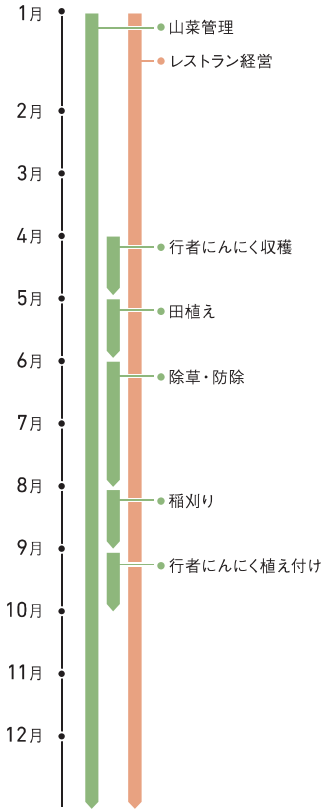
◎取組 2

山菜レストランを経営する佐保さんはもちろん、料理する人、食材を納入する人のほとんどが菖蒲地区の人々。身土不二の理念のもと、地元の魅力発信を続けます。佐保さんの仕事は午前中の弁当の配達、朝礼など多岐にわたります。

活用した補助事業

・さが農村ビジネス支援事業
【主な取組】菊芋味噌粕漬のパッケージ・チラシ作成支援

年間のスケジュール



今後のチャレンジ

山菜レストランから、地区の魅力を発信。

オープンから約15年。リピーターも増え、ファンが根付いた山菜レストラン。「今はランチがメインだけど、もっと多様な使い方ができる場所をつくっていきたいですね」と佐保さん。山菜ツアーやランチタイム以外の利用などを通して、さらなる地区の魅力発信を模索します。

YAMA NO FUTOKORO
06

森林を守ることは、地域の未来を守ること。

佐賀県指導林家
諸熊 雅博

諸熊雅博さんは、唐津市七山に生まれ、この地域で育ち、中学を卒業した15歳から林業の世界へ。それから半世紀以上。現在は、佐賀県指導林家を務めています。指導林家の仕事は、林業技術の普及や林業後継者の育成指導をはじめ、県内の林業のリーダー役として、林業の普及指導活動を担います。また、地域の農家や林家とともに、所得のアップを目指して葉わさびの生産にも取り組みます。すべては、親しんできた森林と地域の営みを守るため。

林　業 × 葉わさび栽培

中山間地域の魅力

「林業は木材を育てて出荷するだけが仕事ではありません。森林に人の手が入らなくなると、水害や土砂崩れなどにつながってしまいます。森林の整備など、この地域を未来へつなぐための使命を感じています」と、林家としての心得を教えてくれた諸熊さん。また、昭和60年ごろから、地域の林家や農家の所得向上を目指し、葉わさびの栽培を開始。葉わさびは、ビニールハウスに加えて、林間でも栽培しています。「間伐すれば、葉わさびもよく育ち、森林の保全にもつながる。一石二鳥やね」と、日々、森林で木々を見つめます。

取組

◎取組 1

林業の世界で半世紀以上。この地域の森林を守り、育ててきた諸熊さん。仕事の内容は、枝打ち、間伐、主伐、地拵え、植え付け、草刈りなど多岐にわたります。その技術や林業に対する姿勢が評価され、佐賀県の指導林家を務めています。

◎取組 2

昭和60年ごろから葉わさびの栽培をスタート。各地へ視察に出向き、この地域に最適な栽培方法を確立させました。農家、林家の所得の安定にもつながり、毎年、直売所に並ぶシーズンを心待ちにしているファンも多くいます。

活用した補助事業

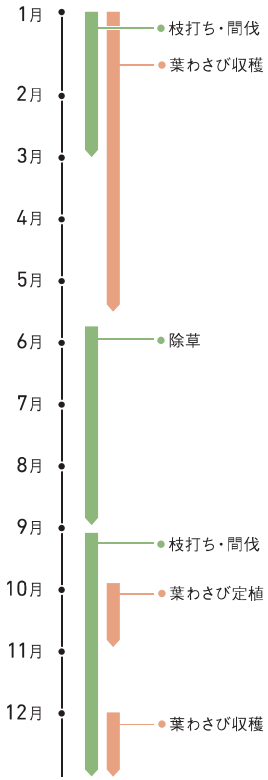
・造林補助金
【主な取組】作業道の整備等に活用

今後のチャレンジ

これからも森林を守り、育て続ける。

長年、森の中で生きてきた諸熊さん。「自分がこの世界に入ったころに植えた木も、立派な大木に育ちました。本当に森が好きで、木々を鑑賞しているだけでも心が落ち着くね」と話します。これからもこの森を守り続け、次世代へつないでいくことを目指しています。

年間のスケジュール



YAMA NO FUTOKORO

07

チャレンジを続けることが、地区の未来をつくる。

農家

草場 廣

唐津市厳木町の天川地区は、標高約600mの山間部。代々受け継がれてきた棚田で育つ「天川コシヒカリ」は高い評価を受けるこの地区の名産品です。草場廣さんは、大分県に生まれ、天川出身の奥さまと結婚し、婿入り。左官業に従事しながら、米づくりにも精を出します。8年前からは、チョウザメの養殖にも挑戦。さらに、焼酎用のさつまいもの生産も開始。複合的にチャレンジすることで、所得の安定化と地域の活気にもつながるように奮闘しています。

農業 × チョウザメ養殖 × カフェ運営

中山間地域の魅力

米づくり、さつまいもの生産に加えて、チョウザメの養殖を約8年前に開始。以前、ヤマメやニジマスなどの淡水魚の養殖をしていたこともあり、養殖のノウハウはすでに持っていたと言います。「何にでもすぐ飛びつくほうやけんね。儲かって、さらに地区の名産になったらいいね、と思って」と草場さん。チョウザメを育てる場所は、閉校になった小学校のプール。「閉校になったけど、まだまだ建物はきれい。みんなの憩いの場になって欲しいと思い、地区のみんなでカフェを開設しました」様々な挑戦は、地区の明るい未来へつながっているようです。

取組

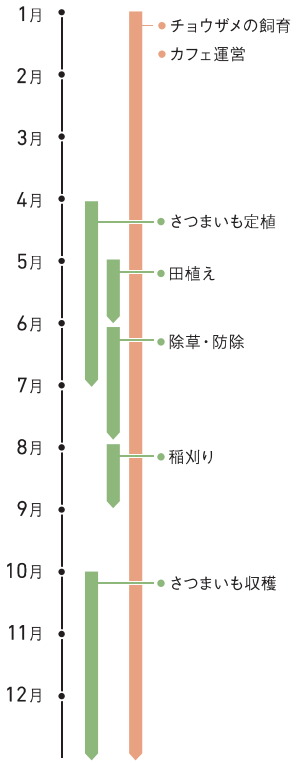
◎取組 1

地区の誇り「天川コシヒカリ」と焼酎用のさつまいもを生産しています。また、閉校になった小学校を利用したカフェ「やまの休憩所」の運営にも地域の有志とともに携わります。団結力の強い天川地区を象徴する憩いの場です。

◎取組 2

天川地区の新たな名産と所得のアップを図り、地区の人たち数名でチョウザメの養殖を開始。8年という時間をかけて、間もなく出荷できるサイズまで育ちます。チョウザメは、淡水魚でおとなしい性格。育てやすい魚だと言います。

年間のスケジュール



今後のチャレンジ

地区の絆を武器に、挑戦は続く。

チョウザメは販売先を見つけることが、直近の課題。またカフェの運営も軌道に乗せることを目標に掲げます。「耕作放棄地も増えるなか、さつまいもなど収入につながるものを育てて、農地を守っていきたい」と地区の人たちと力を合わせ活性化につなげる展望を語ってくれました。

YAMA NO FUTOKORO
08

土づくりからテーブルまで。その挑戦は地域の光。

茶屋二郎
園主
松田二郎

お茶の産地・嬉野市。松田二郎さんがこの地で茶農家として独立したのは、2020年のこと。大学時代に訪れた嬉野でお茶の文化に惹かれて、全国のお茶の産地をめぐる旅へ。各地を回るなかで得た「嬉野が一番」という確信。その後、嬉野の茶農家のもとへ弟子入りします。独立後は、納得いくお茶づくりを追求しながら、SNSを通した発信を続けます。2021年には、お茶とお酒を楽しめるバーを温泉街にオープン。お茶文化を発信する産地のキーマンとして注目されています。

農業 × バー経営

中山間地域の魅力

「もともとカフェやコーヒーの勉強をしていました。大学のときに海外留学に行って、毎日のように飲んでいたお茶を飲まなくなり、お茶に依存してたことに気付きました。日本人なのにお茶のこと知らないなと感じました」と松田さんは当時を振り返ります。弟子入りしてはじめたお茶づくりは衝撃の連続。それと同時に、農家の経営の難しさや飲む人へのアピール不足に気づきました。「お茶をつくるからには、飲む人のことを考えてつくりたいんです」使命は畑から口まで、自分の手で届けること。やがてそれは、バーのオープンにまでつながります。温泉街のバーには、観光客が多く訪れ、お茶文化を届けます。

取組

◎取組 1

昼間は、農家として、日々、栽培技術を磨きながら畑で汗を流します。お茶の生産に使う機械は、特殊で高価なものばかり。農機具や製茶機は他の農家さんに借りているそう。産地の先輩たちの協力あってのお茶づくりだと言います。

◎取組 2

夜になると松田さんはバーカウンターに立ちます。メニューは茶ビールやお茶のカクテルなどユニークでありながら、お茶の魅力を伝えられるものが並びます。浴衣姿の観光客がカウンターに並び、お茶のお酒を飲む姿は、この地ならでは。

活用した補助事業

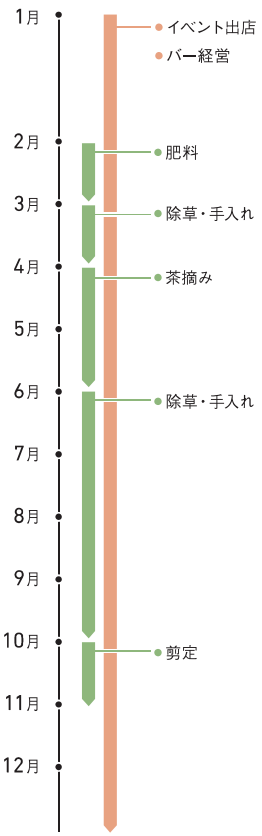
- 農業次世代人材投資事業
準備型(年150万円、2年間)、経営開始型を活用。
- 持続化給付金
コロナ禍にて活用。(上限100万円)

今後のチャレンジ

お茶をもっと身近に、もっとかっこよく。

目標は、茶農家が儲かる世の中の実現。コーヒーやカフェ文化のように、おしゃれなイメージで伝えていきたいと言います。「あらゆるアプローチで、お茶を普及させたいですね」と松田さん。そのために、お茶メニュー開発のコンサルやイベントの出店など精力的に動きます。

年間のスケジュール



YAMA NO FUTOKORO
09

捕まえたいのは、明るい未来。

株式会社西村商店 Ribbon部門 塘 さなえ

株式会社西村商店 代表取締役 西村 明美

西村商店は、上峰町で金属リサイクル業を営み60年以上。2代目の西村明美さんが代表を務めるようになってからは、本業に軸足を置きつつも、他業種へも挑戦。新設された「社会貢献事業部」では保育園事業を展開。園に通う子どもたちが口にする安全な野菜を育てるために、農業も開始。さらに、社員である塘さなえさんの「猟師になりたい」という願いを叶えるべくRibbon部門も設立。事業が多岐にわたるなか、共通するのは、地域の未来を良くしたいという変わらぬ想いです。

金属リサイクル業 × 猟　師

中山間地域の魅力

「私が生まれ育った佐賀市富士町は有害鳥獣の被害に悩んでいます。だから私は猟師になりたい！と会社に直談判したんです」と話す塘さなえさんは、元々、金属の端材を使ってアクセサリーをつくるデザイナーとして採用された社員。そんな塘さんの想いに会社も応えます。「猪を捕まえたその後はどうするの？ということで、会社として猪肉を使用した商品開発に着手しました」と代表の西村さん。栄養価が高い猪肉を、母親目線で安心して食べられる商品へ。猪肉の活用手段が見えてきたなか、狩猟免許を取得した塘さん。新しい循環が生まれようとしています。

取組

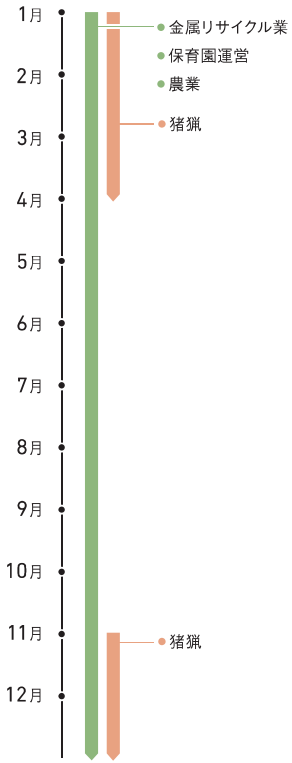
◎取組 1

金属リサイクル業60年以上。リサイクルやアップサイクルの意識が今より低かった時代から、先駆け的にこの地域で、業界をリードしてきました。近年は、保育園の開設や農業など、他の分野にもチャレンジしています。

◎取組 2

塘さんが抱く中山間地域への想いに、代表の西村さんが応えるカタチでスタートしたRibbon部門。猪を捕獲した後の「猪肉の活用」を会社がサポート。子どもたちが安心して食べられる肉まんやシュウマイを開発しています。

年間のスケジュール



今後のチャレンジ

挑戦を支えられる組織でありたい。

これからも異業種への挑戦を会社として見守り続ける西村商店。「○○をしたいと言う社員がいれば、応援したい。働きやすい職場が、佐賀や日本の未来につながっていると信じています」と代表の西村さん。商品開発や仕組みづくりで、塘さんをはじめ、周囲の人の挑戦を支えます。

YAMA NO FUTOKORO
10

観光という魅力の伝え方で、地区の伝統を守っていく。

たかしま農園
高島 賢一

佐賀市大和町松梅地区に生まれ東京の大学を卒業し、旅行業へ就いた高島賢一さん。その後、道の駅大和の店長などを務め、実家の農業を継ぐことになります。代々受け継がれた農地を守りながら、観光業の経験を活かして、2018年には佐賀県初の竹の子の観光農園を開始。さらに地域の魅力あるコンテンツに光をあてようと、仲間とともに古民家を利用したゲストハウスをオープン。松梅地区の農業と農村の営みを次世代へ継承するチャレンジは続きます。

農業 × 観光農園 × ゲストハウス運営

中山間地域の魅力

竹の子の最盛期3月下旬から5月中旬まで、たかしま農園には、県外からたくさんのお客さんが集まります。「竹林のなかに入って、土を掘る体験なんてなかなかできないでしょう。観光農園を通じて、山間部の魅力が伝わればいいね」と高島さんは言います。農家としても精力的に動きます。小ネギの栽培に収穫、冬になれば干し柿づくり。特に、300年以上続く干し柿は、この地区の伝統文化です。そこにゲストハウスの運営も加わります。収入源を増やすことで、収支のバランスが取れ、それが地区の伝統や営みを守ることにもつながります。

取組

◎取組 1

竹林の整備、竹の子観光農園の経営、小ネギの生産、干し柿づくり。高島さんの農家としての仕事は、年間を通して途切れることはありません。地区のコンテンツをうまく活用しながら、農地の継承を目指します。

◎取組 2

築250年の古民家ゲストハウス「笑仲のやかた」。持ち主に高島さんが活用を提案するかたちでスタートしました。卒業旅行や50、60代の常連客など、利用者も幅広く。ゲストとの交流も高島さんの楽しみのひとつと言います。

活用した補助事業

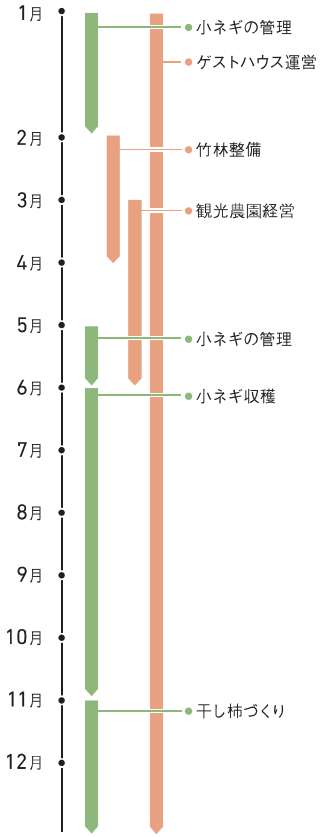
・さが農村ビジネスサポート事業
【主な取組】タケノコ観光農園の開園に活用。樹木粉砕機導入、受付売店の整備、簡易トイレの整備、冷蔵ショーケースの導入

今後のチャレンジ

小さいけれど、魅力ある観光地へ。

増え続ける空き家や耕作をやめてしまった土地の活用ができれば、地区の未来は見えてきます。今後は、趣の違うゲストハウスを開業することが目標だと言います。「暮らすように滞在し、地区の営みが感じられる観光地に発展させていきたいと考えています」と教えてくれました。

年間のスケジュール



YAMA NO FUTOKORO
11

危機感を跳ね返すほどの、山間部の魅力。

脊振の百笑
高島 敏弘

自然が豊かな山間部・脊振村（現・神埼市脊振町）に生まれた高島敏弘さんは、大学を卒業後、役場で定年退職を迎えるまで働きました。退職して、実家の農地を引き継ぎ、長年抱いていた想いを胸に専業農家へ。その想いとは、合併される脊振村の自然の恵みや豊かさを伝え、「脊振」の存在を後世にも残すことでした。代々続いてきた農地を引き継ぎ、守り、次世代にわたすため、この地だからこそできる農業と林業という複合的な農業スタイルで山間部での営みを続けます。

農　業 × 林　業（原木椎茸）

中山間地域の魅力

高島さんが生まれ育った脊振村が、神埼町、千代田町と合併したのは2006年のこと。「平野部で人口が多いのは、神埼や千代田。合併に伴い山間部が見捨てられるのでは？という危機感があったから、魅力ある農産物を育て、山間部の良さを発信したいという想いがありました」と、高島さんは当時の心境を話します。高島さんがつくるのは、ピーマンや干し柿、森林を利用した原木椎茸など。特に原木椎茸は、原木の伐採や搬出、並べる作業など多くの労力が求められますが、年間約2,500kgの収量があり、安定した収入につながっています。

取組

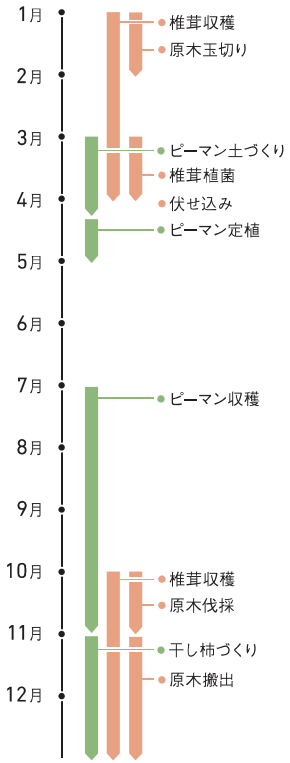
◎取組 1

古くから脊振の五大産業と呼ばれる農産物のうち、高島さんは椎茸と干し柿の2つを生産しています。それに加えてピーマンも生産。山間部ならではの農業で、この地域の魅力や存在感を発信し続けようとしています。

◎取組 2

原木椎茸は、植菌から収穫まで、1年半という期間を要します。それまでにも木の伐採、搬出、並べる作業など、作業の量はたくさんあります。そうして収穫される原木椎茸は、肉厚で旨みがたっぷり。旬を待つ人がたくさんいます。

年間のスケジュール



今後のチャレンジ

少しでも良いカタチで、次の世代へ。

「気持ちだけは昔とまったく変わらないけど、体力が少しずつ落ちてきたね」と高島さんは少し寂しそうに話してくれました。元気なうちは、まだまだ挑戦を続けます。しかし、いつかは必ず次の時代がやってきます。農地やこの脊振の風景、その引き継ぎ方を模索中だと言います。

ようこそ
やまの休憩所へ
皆様 どうぞ ごゆっくり
実仲のやかた
Tora&Shika